



別名、千手観音寺と称し、千音寺の地名の由来となった。749(天平19)年に右大臣藤原豊成が造営を行った。豊成の子中将姫が山門にこもり写経をしたことから、山門は閑籠門と呼ばれた。1468(応仁2)年に山門は焼失したが、現在も山門には閑籠門の額がかかっている。また、グアム島で発見される前に建てられた故横井庄一氏の墓がある。



本尊は阿弥陀如来。草創は不詳であるが1582(天正10)年に尾張国司織田信雄(信長の次男)より寄進状を受け、開基となった。開山当時は平田山極楽寺と称した。1616(元和2)年大洋宗吞和尚が中興した。1658(万治元)年に改号し、無量山長禅寺と称した。



「松下の蓮如さま」で知られる。寺には七宝焼の元祖である梶常吉作の七宝焼の香炉・数珠が保存されている。また、寺の裏には梶常吉の碑がある。寺宝には蓮如上人作の上人像と伝えられる木像があり、毎年旧暦の3月24日から3日間ご開帳される。



前田利家公寄進の聖徳太子御作阿弥陀如来が本尊。尾張・加賀前田氏発祥の地。前田城があったが、1584(天正12)年徳川家康に攻略され、利家の祖父などの墓三基が残った。利家の叔父意休が墓の傍らに鎮魂の小堂を建て、速念寺の初代。寺伝では、利家懸弧(出生)の地で、6歳頃、父利昌が新設した荒子城に移ったという。



創立は、1502(文亀2)年と伝えられるが、天文年間(1532～1554)に僧明観により再建されたとされている。



710(和銅3)年行基の創建と伝えられ、1433(永享5)年地頭戸田弾正左エ門によって清須から移建した。薬師堂に行基作と伝えられる秘仏の薬師如来がある。昔から「朝日夕日のさすところに小判が埋めてある」と伝えられ、それに因んだ覚王山鉄心師の「脚下黄金地」の扁額がある。



創建は天慶年間(938～946)朱雀帝の時代と伝えられている。堂塔伽藍等を並べた名利であったと云われているが一時廃寺の状態であった。明応年間(1492～1500)円教院日意上人が再建した。



庄内川にかかる万場大橋から100メートルほど南に万場の渡し跡の碑と常夜灯が立っている。かつて、佐屋街道は、川向こうの岩塚宿との間を渡し舟で渡った。『尾張名所図会・万場川船渡』の図にその様子が描かれている。



戸田川沿いに広がる公園。「水と緑のふれあい公園」をテーマに、テニスコートや子ども広場などの施設が設けられ、現在も整備が進められている。また、地元のボランティアグループによる花壇づくりも行われている。



行基菩薩の開基と伝えられる。昔は雲龍山無動寺と云われ、1710(宝永7)年現在の名に改められる前は南蔵院と称せられていた。現在境内には鎮守稲荷社、観音堂がある。また、旅人に無償で宿を提供していたことから、「布施屋地蔵」と呼ばれ人々に親しまれている。



創立は、1445(文安2)年、僧是観によると伝えられている。六代までは天台宗に属し、寶樹院と称する。七代木全順正の時、真宗に改宗。寶樹山寶泉寺と改称。寛永元年、中野村より現所へ移住、現在に至る。



中川区と港区にまたがる大規模な公園。北・中央・南の3地区から形成され、「健康とスポーツの里」として、誰もが楽しめる健康づくりの拠点として整備されている。また、ここでは、市民・企業・行政のパートナーシップにより、苗木を植え、次世代に伝える豊かな森を育てていこうとする「なごや西の森づくり」が進められている。



故横井庄一氏(1915～1997)は太平洋戦争に出征し、終戦を知らぬままグアム島のジャングルに潜み続け、27年後の1972(昭和47)年に奇跡の生還を果たした。この記念館には、ジャングルでの生活を再現した展示や横井氏の書や陶芸などが展示されている。日曜の10時～16時30分に開館。無料。



佐屋街道の脇にあり、万場宿の高札場。平安時代初期の作である延喜式神名帳にも記録されている海東郡八座の内的一座で由緒ある神社(延喜式内社)。津島牛頭天王社の地主神。現在では国玉神社と八剣社が合殿になっている。



1578(天正6)年、伊勢の国司北畠宰相具親入道道教が中興造立した。1614(慶長19)年、僧超円が当時の寺号を円盛寺と改名したと云われる。



蓮如上人の孫教誓が創建。本尊は阿弥陀如来。四代淳誓は、堀尾金助の母の話で知られる熱田区の裁断橋の架橋に尽力した。西照寺には1702(元禄15)年に戸田まつりが始まったと言う記録がある。また、1873(明治5)年、戸田小学校の前身「素誠学校」が西照寺に開校された。



1632(寛永9)年西光院五世快空教然上人が再建したと伝えられている。観音堂は1856(安政3)年孔空寿硯上人の創立とされている。現在の本堂は濃尾地震で倒壊後、1899(明治32)年に再建されたものである。



1679(延宝7)年に山城国の摂化寺より本尊を引き取り、恵春により建立された。現在の本堂は濃尾地震により倒壊し、1908(明治41)年に再建された。境内中央のいぶきの木は伊勢湾台風(1959年)の強風で北西の方向に傾いている。

参考文献『中川区みどころマップ』はっけん・たんけん・中川区まちの魅力発信隊/その他(各紹介寺社資料)

中川区富田地区は、旧く平安時代に成立した富田荘を起源としています。 荘園時代の富田の歴史と現在言い伝えられている地名のいわれをご紹介します。

富田の地名のいわれ

- とだ 戸田……「此村往昔富田に作る、俗にとむ田と云、後略して戸田と書来れり」とあり、戸田は富田の佳名読み。
- はるた 春田… はるだは、治田・壱田の意味で荒地を開墾した意味。「富田、壱田(とだ、はるだ)同時に開拓せし地とぞ」との記述がある。
- えまつ 江松……「榎津と江松とは其間八町を隔つといえども、旧は一円なる歟、扨て江松も榎津も並にもとは衣那津と呼しを後世二村になりて、おのおの今の名に呼びにしあらんや」とある。
- よのきづ 榎津… 江松と同じく、もと江奈津と呼んだ湊であった。湊といっても漁港のようなもので、天明五年(1785)には榎津貝塚が発掘されている。
- かのさと 包里… 包里は兼里の意があり、一里の外にある余分の家を兼包んだために名づけられたとされる。戸令では約五十戸が一里の基準でありこれを上回っていたと考えられる。
- ながすか 長須賀… 洲処が長くつづいた状態からとったとしている。昔は長須賀郷といわれていた。
- ふしや 伏屋… 布施氏の所有田があった説と無頼の旅人を救った布施屋があった説がある。
- まんば 万場… 馬場が転訛したものをいう。馬場は大きな神社の傍らに祭りのための馬場を設けたところをいうもので、この場所に神社があったのではないかと。また、熱田神宮総検校の馬場氏が所有する領地であったとする説もある。
- はっとり 服部… 正しくは機織部(はたおりめ)。織布に従った部氏がいたので、そこより生まれたといわれている
- せんのにじ 千音寺… 「その地名は寺院に出たり、此村の旧名を赤星村といひたるにや猶たずねるべし」とあり、寺からでた地名で、千手観音寺の略称であろうといわれる。
- にいえ 新家… 「此むらの正字、新江の誤なるべし。応仁以来假字をあやまること多し」「此むらは辺は鎌倉の頃、新治(にいばり)の地なるべし」とある。正しくは新江であろう。
- ※…… あくまで、一説一部を紹介したにすぎません。みなさんも興味があれば調べてみてはどうでしょうか。

参考文献『富田のあゆみ』富田のあゆみ編集委員会/『中川区史』区政50周年記念誌編集委員会

富田の歴史の話 ～富田荘の時代～

【富田荘の成立】

富田荘が具体的な範囲をもって成立したのは、11世紀の終り頃である。当時の日本は、藤原氏一族による摂関政治がようやく終りをつけ、天皇家による院政の始まりと、地方では武士が台頭しつつあった時代であった。富田荘の荘園としての範囲は、寛治年間(1087～1093)の太政官符によりその四方の境界がさだめられており、その範囲は現在の富田地区に蟹江町の全域と港区南陽地区、大治町、あま市(七宝町)の一部を加えた南北約6キロメートルにまたがる地域である。

名前の由来は、庄内川下流域の三角州の先端で、南辺で海岸線に接しており、豊饒で良米がとれたので富田と名づけられたということである。

富田荘が実際に荘園として機能し始めるのは、1103(康和5)年、右大臣藤原忠実が富田荘の下司職に大膳小進秀政を任命して荘務をとらせたときからである。富田荘は、中世を通じて近衛家を領主とする荘園であったが、京都に居住していたため、実際に荘園を管理していたのは地頭以下の荘官(在地武士団)たちであった。

【支配権の推移と地頭円覚寺】

12世紀終りの源平の全国的な内乱を経て、富田荘は北条家が地頭となり、領家である近衛家を圧倒し荘園経営の主導権を手中にしていくな。そして、1283(弘安6)年7月6日、富田荘は北条時宗によって、北条家から鎌倉円覚寺に寄進された。これをもって富田荘の実質的支配権は領家側から地頭側へ移ったと考えられる。

【富田荘の終末】

円覚寺の荘園支配は在地性のない荘園領主に近く、在地勢力を地頭代にして支配を一任していた。1349(貞和5)年頃には、円覚寺の在地支配が在地武士によって侵略され、また、しだいに成長する農民層が、在地に根をはる領主層の指導のもとに公然と反抗したため、ほとんど権力を喪失した。

そして、1396(応永3)年6月5日に円覚寺は富田荘の当知行分を幕府政所頭人伊勢氏所領上総国(現在の千葉県)、堀代・上郷・大崎の三郷と交換され、地頭円覚寺の富田荘支配は終焉となった。その後、応仁の大乱がおこり富田荘は、守護大名・戦国大名の支配下に編入されていったと考えられる。 参考文献『富田のあゆみ』